
MINE IN MY HEAD...?

スイーツ男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M I N E I N M Y H E A D . . . ?

【Nコード】

N 8 3 1 4 L

【作者名】

スイーツ男子

【あらすじ】

仮想未来の都市に住む『ボク』は、とある夢に悩まされていた。それは弾の途切れない銃で『何か』を殺し続ける夢。言い知れぬ薄ら寒さを感じながら、目覚めた4月1日。『ボク』はその銃を部屋に見つけて．．．近未来厨二病ガンアクション小説です。行き当たりばったりで超マイペース更新のため悪しからず。

4月1日

ボクは、
どこまでも、
どこまでも、
どこまでも普通だった。

そう。

ただ普通でフ・ツ・ウでふつうな普通^{モフ}人。

え？

そんな奴なんていないって？みんなどこかしら違うって？
そんなこと知ってるよ。ただ誰もそんな“些細な”違いには気付かない。

『異常』でない限り、それが明らかな違いでない限りボクは忘れ去られる。

嗚呼、嗚呼、嗚呼、ボクはそれが恐ろしくてたまらない。

この世界に何も痕跡を残せないのが怖い。嫌だ。無駄だ。存在が無意味だということの認定。

REFUSED = REFUSED . . .

だからボクは壊れた……いや“壊した”。

その器を。その世界を。

いや、正しくはもう一つの世界を、だが。

ゲーム。そう……最初、それはゲームだった。

“つまらない”ゲーム。

つまらなくて、意味の通らなくて、生ぬるくて、グダグダして、馬鹿馬鹿しい……まるで平和ボケした日本人の子供ガキの人生のようなゲーム

『リセットボタン』はどこ？

もう一度言おう。ボクは怖かったただけだ。なのになんでこんなことになってしまったんだらう。異常になりすぎてしまった。

帰れるなら帰りたい。

そう、贅沢に物思いに時間を使いながらボクは撃鉄を起こす。何で、何でこんなことに慣れてしまったんだらうね？ボクは。そんな、夢を見た。

*

4月1日

「これほど最悪な目覚めがあるだろうか……」

嗚呼、フロイト先生に診てもらいたいね。まあ、あの先生の場合、大体の診断結果は性的欲求の表れとか判断されるのだろうけど。

馬鹿なことを考えているうちに、次第に自律神経が活発化する。小4、5分ほどかかってようやく布団から起き上がると、

そこにパンがあらわれた！

.....。

いや、別にギャグ的なものではなく。それが大衆階級の支給配食スタンダードだった。

もつと上級の階級なら食事に何を支給されるか選べるらしいが特に興味は起きない。

これはこれで乙なものだと思ってボクは満足している。

規定量の小麦と材料で作られ、万人に等しい分量の食事が支給されるこのシステムは、20世紀に崩壊した主義の発展系であると、学校の教師が言っていた気がする。

万人に平等エキユアルかつ理想的な、人類が考えうる中で完璧パーフェクトの社会体制。

まあ、その万人には上流階級アッパークラスの人間は含まれてないだろうけど。

そんな、“言葉にして発しただけで分離主義者扱いにされるようなこと”を考えながらボクは規則的にパンを頼張る。

パンはいい。食欲があろうがなかるうが一応は流し込める。昔、日本人という民族、つまりボクが血を引く民族は“コメ”というものを主食にしていたらしいが、生産性の非効率がどうたらで、コメは漢民族系の身分の高い連中にしか出回っていないらしい。

まあ、とりわけ食べたい訳でもないが。
心情的にモヤモヤする微妙な所があるだけで。

そんなこんなで、最後の一切れをよく分からない液体（野菜やらフルーツやらを栄養学上、理想的に配合したものらしい）で飲み込むと、不意にどっと疲労感が出てきた。

おかしいな？体を動かすことなんてしてないのに。それこそ夢の中でしか最近では体を動かしていない状態だった。

訝しげながらパンが乗っていた皿と、もはや茶色に近いような色をした液体が入っていたコップとを一緒に機械に戻す。

すると機械は、ボクの目の前に最初に食事を出したときと同じようにそれを勝手にかたづけしてくれる。

それはもうあつという間の全自動。目にもとまらないハヤワザ。

なんでもこの機械を都市全体に張り巡らすときに、どの設備会社が発注を受けるかどうかで競ったとき、僅差でこの早さを買われて発注が決まったらしい。

嗚呼、馬鹿馬鹿しい。

時計を見ると、ちょうど8時を告げる秒針が十二時^{てっぺん}を通過したところだった。

もう学校に行かないと。

あの取り立てて意味のあるようにも思えない箱^{びっぴ}も、行かなければ生活が保証されないのだ。

不要な部品^{パーツ}に存在価値はない。それが今のこの都市の、世界の理^{ことわり}

だった。

ボクはそのそと着替えると、学校に行くために玄関から外へ出ようとした。“した”、のだ。その時はちゃんと。

そこまでは良かった。

でもボクはそこで見慣れないものを見つけてしまった。

“計画都市”の玄関はひどく狭い。リビングから一間続きでスペースはほとんどない。

そこに一際ひときわの異彩を放つ黒いモノ。

それは、ボクが夢の中で握っていた、いや必死に振り回していたモノで、

それである人間モドキを駆逐したのだ。ボクは。

闇夜のような漆黒の色をした、『銃グロック』が、そこにはあった。

銃。

それは圧力や火薬の爆発力などによって（殺傷性の有る無しにも
だいぶ差があるが）金属弾などを対象に発射するものである。

現在のこの都市の法では、狩猟目的である^{いま}うが他人を殺傷する目
的である^{いま}うが所持しているだけで即、大衆階級剥奪^{スタンダード}、さらに都市か
らの無期限追放と厳罰がスラリである。

それでも死刑とかは“もう少し”やらかさないと処されないのだ
けど。しかし、都市から放り出された時点で野垂れ死ぬのは目に
見えているから、追放も死刑も大差はないのだけど。

そんなことになったらボクはどうしようかね。今のこの生きてい
ても死んでいるのと同じような、ただ社会の歯車を回す部品の製造
ラインに乗ってどんどん加工されていくような生活が崩れてしまっ
たら。ボクは悲しくて悲しくて大変なことに……なるの？ん、ん？
あれ？ボクってこの都市^{まじ}が好きだったんだっけ嫌いだったんだっけ
??

なんて、目一杯狼狽しながら目を何度もゴシゴシ擦ってみる。
……うん、変わらない。そこには変わらず銃が置いてある。何で
だろうね。都合の悪いものはポケットを二回たたけば消えるんじゃない
なかったっけ？

.....

あ、あれはビケットだったか。しかも増えてるな……。

やっぱりまだ頭が混乱しているらしい。

パチン、と自分の頬を叩いて気合いを入れ直してみる。

よし。銃に触ってみよう。

このままでは何も進まないし。何かをしないでこのまま無為に時間を潰してもらえない。ボクは浅く息を吐き、意を決して銃に触れた。

……固い。

それが最初の感想。

その凶器は確かに固く、現実としての形を保ってボクの手の内にある。

そして、次に襲ってきたのは強烈な既視感だった。

(何だ、コレ?)

思わず手を離しそうになって、踏みとどまる。
セーフティ
安全装置がかかってないと暴発する可能性がある

(何で、ボクは“知っている”んだ?)

それにこの手に馴染む感じは何？

ボクは“コレ”の使い方を知っている？

手の震えはすぐに止まって、ボクの手は無意識に安全装置を外し、
構えをとる。指は引き金には掛からず自然と真っ直ぐに伸びた。

そう。

ここを少し引くだけで弾が出て、あの人間もどきの“イロイロ”
をぶちまけられるのだ。

d o u s h i t e s o n n a k o t o w o
s h i t t e r u n o ?

感想の第一。

気持ちが悪い。最悪に。

感想の第二。

気持ちが良い。最高に。

矛盾しているようだが、今のボクはまさに矛盾そのものでしかな
かった。

恐怖よりも、この銃グロックに心を奪われた現在いまこの瞬間、早くこれをど
こかに捨てて忘れてしまふのが最良の選択だろう。そんなの分かり
きったことなのだ。

それなのに、ボクはソレを懐に忍ばせ学校への平坦な道を進む。

本能が危険を叫ぶなかで、『非日常』に心を踊らされ続けながら。

でもボクはまだこの時点では普通だった。

*

平坦。

どこまでも平坦な道。

都市化に際して、臨海部以外はほとんど平地となった地盤の上を、『ボク』は走っていた。

いかんせん、あの銃ブロックに気をとられているうちに時間が大変まづいことになってしまっていたのだ。

今日は4月1日。

フツウの登校指定日。

……そういえば3月に新学期が始まるように統一させられたのは一体どれほど昔だったか。

グローバル国際化というのはそれぞれの民族性アイデンティティを保ちながら進むものだと考えられたのもそのさらに昔のこと。

驚異的な勢いでユーラシアのほぼ全域を席卷した共産主義の大国

は『発達した資本主義は社会主義に移行する』という考えのもと、支配下に置いた各国の大規模市場を、強力な資本と接收した量子コンピュータによって統制した。

さらに過去に崩壊した社会主義国家の教訓から、上層部の集権を無くす方法として国家運営に『AI』を用いることで、彼らの言うところの『公平性』を完璧なものとなつたらしい。

そんな風に世界が統一される中で、最後まで抵抗したのが自由資本主義の民主国家である。

資本主義の宗主たるその国は、共産・社会主義国でない国の取り込みを行ったが、その国にそれまでの勢いはなく、市場封鎖による締め出しによつて初めは経済から、次には直接砲火を交えることなく勝手に内部崩壊した。

そして遂に統一が完遂された頃には、かの国家はもはや『国家』ではなく『世界そのもの』であった。人種や宗教の差異は徹底した廃絶教育により2、3世代で消え失せ、世界は平等に

なるはずもなかった。

戦線の維持と、国民の支持獲得には特定の人種、特に富裕な人間プロバガンダの取り込みが欠かせない。

結局、財を国有化する見返りとしての上流階級アッパークラスが用意されたのは、覆しようのないこの世界の事実。

今ではその階級の人間の数も昔よりは減ったが、未だ地方都市での発言力、影響力は強いはまだ。

『いったい、この世界の何処が平等なのか？』

その問いは燻^{くも}ってはかきけされ、目に見える反乱の火種にはなっていない。

ゲリラ的な戦闘もあるらしいのだが、“都市”の中ではその情報や活動のほんの一端すらもお得意の情報統制によって完全に遮断されている。

らしい。

……どうにもこうにも、頭の中がこういう情報ばかりの物騒な友人と付き合っているとこんな事にはかり詳しくなるようだ。

今までののは全てソイツの受け売り。コピーですね。

なんでもソイツの家庭が民主化運動に何代にも渡って入れ込んでいるらしく、かなりアンダーグラウンドな活動までしている……らしい。どこまで本当なのかボクは知らないけど。

少なくともこの話を公安^{けいあん}にすれば、問答無用で收容所^{けいさうじょ}行きぐらいのレベルの“話”である。

……まあ、別に言わないけどね。

信じてくれるから話してくれたのであろうその友人を売ろうと
いう気持ちはない。

幾度となくソイツから活動家入りを誘われるのはウザいけど。
何でだろう？

彼にそこまで信用されるいわれも無いのだけれど。

まあ……何となく憎めないヤツなのだ。

この銃グロックを持ってきたのも、彼に見せたかったからだ。
そして彼の、冷静で客観的な意見を聞きたかった。

弾むような、

落ちるような、

そんな奇妙な気持ちのまま、ボクは箱形の建物がっしりにたどり着いてい
た。

4月1日(後書き)

序章です。

それよりも主人公の名前がまだ出てないことに気づく作者。

行き当たりばったりで早くも『ばったり』な予感がする今日この頃。

……どうしましょっ？

ある晴れた昼下がりに

*

「頭、大丈夫か？」

「あー……多分」

「お前がそんな与太話をもってくるとは思わなかったが」

「うーん、ねえ？」

「ねえ？、つて言われてもな」

「相談くらいには乗れるんじゃないの？」

「俺にはどうにも出来ないぞ？」

「……………」

そうだった。

失念してたよこの堅物の石頭のことを。

自分で見たものしか信じない。それでいて一度自分の進む方向を決めると後はそれにまっしぐら。

融通の利かない一本木な性格はまさしく……

「……………役たたず」

「ぐっ、ごほっ！お、お前その顔すんな！こつちが悪いみたいじゃんか……」

ちなみにそんな顔とは、目を潤ませた媚び売り全開の顔である。注意しておくけどボクが“そういう”キャラな訳ではない。

これはこの堅物限定で通じる技なのだが、これが効果テキメンなのだ。

頼まれると「うん」としか言えない性格、というやつなのだろうけど……扱い易すぎる。いつか絶対に誰かに騙されるだろうとボクは思っている。

「まあ、だからこそそのグレンだけど」

「つたく。人をおちよくりやがって……」

幼稚舎からの腐れ縁の友人、グレン・リーはムスツとした表情のまままだ。

あー、へソ曲げた？

「まー、まー機嫌直して。ああっ、アレもまだ見せてなかったし」

ボクはゴソゴソと鞆を漁ってあの物体を探す。

その姿を不思議そうにグレンは見ていたが、鞆から黒いそのフォルムが見えたとき、雰囲気が一変した。

「これって……」

「銃、だよ。君が見てもそう見える？」

「……ああ。誰がどうみてもそうだろうな。……触ってみてもいいか？」

うん、と首肯するとグレンは恐る恐るといって手つきで銃グロックに触る。

「……固いな」

「ボクの感想とまったく同じだし」

なんて言いながら、ボクはグレンが銃をいじるその姿を見ていた。コイツとの付き合いも二桁に近いから、大体の考えていることもわかるんだよなあ……。

「引き金、引いてみたいんじゃないの？」

「えっ？？」

「わかりやすいねグレンはホントに……」

「こんな」のサイレンサー
屋上で消音器なしで撃つたら爆音で学校中にバレることを、よく噛んで伝えるとあからさまに落胆した表情を見せられた。それくらいわかるだろうに……。

「しかし本当の本当に本物なのか？ただの玩具なんじゃないのか？」

「……そんなに撃つてみたいの？」

「だっ、だから違う！“こんなもの”のご時世にただの学生の所

に降って湧いたりするのかわつてことだよ」

「……………」

正論だ。

確かにわかる話だし、本物かどうか疑うのは当然のことだろう。

でも……

「わかるんだ、ボクには。これは『本物』だって」

この重さ、手触り。夢と寸違たがわない。

あるのは不自然な、意味の通らない独りよがりな確信。
誰がこんな言葉を信じるだろうか。

だが返ってきたのは、

「……………お前がそついうならそつなんだろつな」

優しい、肯定だった。

うーん、やっぱりいいヤツだねグレンくんは。

「そーゆうとこ女子にもポイント高いんでしょうな」

「ぶはっ！だから今日は何なんだよ本当に……！」

何となく思ったことを言うと思いつきり嘖き出された。あらら。

一気に三枚目の顔だ。

「俺は真面目に……！」

「あー、ゴメンゴメン」

あは、そういう堅物なところもまた良いヤツな感じがするね。
ひらひらと平謝りをして立ち上がると、グレンの持っていた銃を
回収して（すごく悲しそうな顔をしていたけど無視だ無視！）屋上
から階下に降りた。

授業をしている教室の前を上手く避けて自分のクラス（自習だっ
たためグレンとふけていた）の戻る、その道程。

急に頭に鈍い『痛み』が走って、ボクは膝を床についた。

「あ……、うぐ……」

声を、無様な呻きを、極力抑えて壁に崩れるようにもたれかかる。
痛い、いたい、イタイ。

実を言うとこれも『また』あたまのいたみだった。

……よく考えるとこの頭痛が始まったのはあの“夢”と同じ時期

だった気もする。

いや、実際そうだった。

あの夢をみた翌日には決まってこの頭痛がボクを襲っていた。

なんで、なんで、なんで。忘れていたんだろう？

* 閑話。

頭痛が収まりかけてきたので、壁に手をつき体を起こしてみる。
こういう時にサツと現れてくれたら本当にヒーローなんだけどね
グレン君。

危機になっても友人が現れない自分の不遇さ（ひどく独善的な言
いぐさだけど）を嘆きながら、ヨレヨレと自立した。

これはあれだね。東の島国の名作で言う、ガンムがたった。い
や違うクララだっけ？

まあそれくらいボクにとっては感動的な自立だった。

すぐクラツときてまた倒れたけど。

その自分がコンマ数秒後に受けるであろう衝撃に対して、本能的
な恐怖が働いたのかキユツと目を閉じ体を強張らせたのだが、いつ

までも堅い床の感触はしなかった。

感じるのは久しく感じていなかった誰かの腕の感触。

おそろおそろ、目を開ける。

そこにいたのは……グレン、なはずもなく。

そこにたっていたのは見たことすらもない少女、のような男、もとい儚げな少年だった。

*

「あの……君……」

だれ？、と初対面の相手に聞くような不作法はしない。

ただ僕は目の前に現れた“彼”の薄く開かれた瞳を見つめた。

そこに映るのは、自分の顔。

ポカン、とこれ以上もないくらい間抜けだった。というか僕だった。

「とりあえず……お礼を言うべき？」

「……………」

反応がない。ただのしかばねのようだ？

そんな風にふざける気も、道理も今は無いのだけれど。

ただ見つめ合うその格好があまりにも……アレだから？結構焦り

といつか動悸は激しくて。

「恥ずかしいからおろしてくれろ?」

だから拒絶。

「!.....ごめん」

.....。ちゃんとした反応が返ってきて少し面喰らう。

「謎の、紳士的なキャラとかではなかったんだね」

「.....?降ろすよ?」

彼に支えられながらゆっくりと上体を起こす。ふむ、はあ。一呼吸して向き直る。身長は...若干彼の方が高いようだ。むかつくね。

「それで、君は誰?」

そして結局僕は聞いていた。

意味も栓もない言葉を。なぜだか体の何処かが答えを知っている気がする問いを。

何処って.....?“頭”、か?

そして彼の答えは、、

「……あなたを、迎えに来た」

そう言った彼の瞳は悲しげで、

ただ僕は、

彼が放った拳を腹部にまともに受け、

また意識を手放していた。

ある晴れた昼下がりに（後書き）

新キャラ、襲来。さらに謎のキャラクターはよく分からないまま現れては消え……。るのでしうか？

行き当たりばつたりのある種の勢いと言つのはなかなかたいしたものかもしれないと発見する17歳の今日この頃。

終わりゆく日常

*

平穩とは、安寧とは。

この社会ではそれが社会の基本、またシステムの一部である。

何故なら安全保障は、国家から大衆へ付与される“報酬”としては高級の位置に冠するものであるからだ。

『安全』と『平等』。

その“供給”にはかなりの国力と、財力と、国家の成熟が必要だった。

……あくまで“だった”、だが。

統一され、競争に晒される必要のない世界に、治安の心配はほとんど無くなっていった。

たまに現れる社会不適合者も、矯正の名の下に都市から追放されれば……。

……とにかく、世界は平和になった。

大きな大きな膜で包み込まれるように。脅威から、隔絶されて。

たとえ膜の内が腐りかけていたとしても

*

ヒカリが当たっていた。主に顔に。

あ、ヒカリとは光だ。片仮名にした意図はそれほど無い。

k a r u k u k e i h a k u n a b o k u n o i s h i k i .

その眩しさに目を細めた途端、鈍痛を頭部と腹部に感じた。

「……………」

痛みに顔をしかめながらも起き上がって周りを見渡す。

……………牢獄？

灰色の壁。高く小さな窓。ただイメージと違うのはそのだだっ広さと、頭上にある豪勢なシャンデリラだけだ。

「何でシャンデリラ？」

ポツリとつぶやいた言葉に、

「それはここの主の趣味だから」

なんか答えが返ってきた。

「え?」

声のする方を振り返ると、そこには……さっきの少年。

彼が、今にも消えそうな（まったくもって私の主観だけど）様子でそこにいた。立っていた。

その二対の瞳には僕の姿が相も変わらず間抜け面で映っている。

見下している、という様子は感じなかった。

ただ何というかその……宇宙人が未確認生命体と未知との遭遇をして珍しいものを観察している、というのが正しいような。

「アンタは……」

誰?とはもう聞いたな。答えはもらってないけど。

……てか……って……。

「何処……?」

「……答えられない」

へえ、そうですか。

「じゃあアンタ何?僕をここに連れてきた理由は?家には帰してくれるんだろっね?」

矢継ぎ早に言葉が生まれる。あれ僕ってこんなに饒舌だったけ?、と思うほどの舌の回りよう。

不・思・議。

「……答えられない」

「あつそ。じゃあ自分で出てくよ」

体に力を入れると何とか起き上がることは出来た。まだふらつくがそんなことに構ってられない。

すぐにそのまま立ち去ろうとした。“した”が、それは無理に押しとどめられてしまった。

眉間に冷たい感触がする。鉄の、室温とは違うひんやりとした冷たさ。

^{ヘレット}銃が僕に突きつけられていた。いや突きつけられている。現在進行形。ここ大事なな。

「座って」

さっきと変わらない口調。でもそこには一段と冷たさが追加されている気もした。

「……もし嫌だと言ったら？」

「手荒な真似はしたくない」

あの学校での、気を失う直前に受けた体術の手練れぶりは受けた僕自身が一番よくわかっている。

この人は強い。出鱈目に。

(……どうしてそれが分かるのかは分からないけど。)

両手をあげ、抵抗の意志のないことを示すと彼は銃をすぐにおろした。

(それにしても……)

相も変わらず揺らがない瞳。

現実とは思えない状況、情勢、待遇。
体験したことの無い非日常の香り。
フエントジー

(喜ぶべきなのかこの状況……?)

でも素直に喜べるはずもなかった。

demo “boku” nara koroseru yo?

「つつつつ!？」

さっき、彼に銃を突きつけられてから頭痛がさらに激しくなった。

「ゼクス、お前はもういい。下がっておれ」

「はい……」

その老女はあの少年を一瞥もせず、命令を下す。

その濁った灰色の瞳が捉えて離さないのは「僕」だ。

その空間を震えさせる声もさらに魔女らしい。

その異常な状況で刹那に僕が思ったのは、あの少年の名前は「ゼクス」だったんだということだけだった。

「さて、本題に入ろうかね姫？」

目の前には舌なめずりをする魔女が、一人――

*

おかしい。

それに俺が気付いたのは昼休みになったときだった。

(いつもなら昼飯をせびりにやってくははずだが……)

来ない。アイツが。

俺と別れてからてつきり教室に戻ったものだと思っていたのだが。

(……珍しいこともあるもんだ)

クラスメイトが「旦那」は今日はいないのかー？とからかう声を無視して（なんかお前らもう夫婦じゃね？みたいなノリでクラスでは俺らは扱われている）、黙々と自分で用意した弁当を食べた。

……二人分作ってきてたからかなり多かったけど。

とくに俺はその時は気になていなかった。

本格的に心配になりだしたのが放課後。

(いよいよもっておかしい。アイツが昼だけじゃなく間食おかしすらせびりに来ないなんて)

……いろいろとおかしいが“これ”が俺たちの“日常”だった。

(アイツはそれが不満だったようだけど)

口には出さない。でも感じていた。

アイツは“日常”に飽きている。自分の存在がちっぽけで、取るに足らなくて、いなくなってもすぐ後は誰かが埋めることができずまっ。

そんな“ジブン”という器に飽きて。
夢見がちにふわふわしている。

それが、『アイツ』。

『俺から見た』、とつけないとアイツは怒るだろうが。

*

人捜しなど、この都市まちでは息を吸うくらい簡単な事だ。
埋め込まれたIDは俺たちを子飼いの羊のように監視している。

……俺はそれが嫌で嫌でたまらないのだが。

(こつこつという時は便利だと割り切った方が良いんだろうか?)

ネットワークに接続。条件、人物を指定。相手からの拒否申請……
無し。

” - - 検索開始 - - ”

量子コンピュータからの回答は三秒も待たずに瞬時に出た。

” 検索結果 - - ERROR ”

「……………」

” 再検索 ”

” 検索結果 - - ERROR ”

その文字を見たとき、真つ先に思い浮かんだ『原因』は、朝のアレで。

「……………」ミオのやつ、公安に引っ張られたのか？」

しかし、それならERRORにならない。

” 死んだ人間 ” の遺体座標すら管理し尽くすこの世界に、捕まった程度で存在を消されることなんてあり得ない。

(仕方ない。学校の監視カメラは…………と)

馬鹿馬鹿しいが、こんなデータはいくらでも蓄積され、メモリの海の底を漂うのだ。

それを誰もが『平等』に得られるのも、この社会のスバラシイところらしいが。

(屋上への通路から教室までの区間。時刻は……10時から12時、といったところか)

早送りで人形のように動く人影を見ながら、たった一人の顔を探す。

「……………」

廊下を歩いている。だが、どこか様子がおかしい。そのうち壁にもたれだした。

(前に言ってた頭痛、か…………?)

ふと、その事を思い出したとき。

その次の映像ではミオは消えていて。

驚いて映像を止めようとしたその時、

視界の隅に、

見慣れない真っ黒な『少年』を見留めた…………

終わりゆく日常（後書き）

ようやく主人公の名前が登場。

いや、考えてなかったわけじゃないんですけどば。

ちょうど「けいおん！」を久々に見たとかではないんですけどば。

……なんかいろいろスイマセン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8314/>

MINE IN MY HEAD...?

2011年10月7日03時51分発行